

CAN-DO リスト作成・活用
英語到達度指標
CEFR-J ガイドブック
(CD-ROM 付)

投野由紀夫 編

A5 判・322頁
本体3,200円＋税

[評者]

小橋雅彦



CAN-DO リスト作成には欠かせない1冊

待望の書である。本書を読めば、CEFR に準拠しつつ、日本の教育環境における英語に関する枠組みに特化して開発された CEFR-J のことがすべて分かる。

3つのパートで構成された本書はガイドブックとしての使いやすさに配慮がなされ、節末には「まとめ」があり、「もっと知りたい方へ」で情報提供がなされている。これらの工夫が本書の利便性を大いに高めている。

Part 1「CAN-DO リストの原典：CEFR とは？」では、CEFR について、枠組みの設定から出版に至る経過、言語教育観、A1 や B2 で表されるレベルなど、CEFR-J を理解、活用する上で必要不可欠な項目が説明される。中でも、CEFR の理念である「行動指向アプローチ」は授業で扱うタスクへの指針を与えてくれる。

Part 2「CEFR-J を理解する」では、CEFR-J が基礎レベルをより詳細に枝分かれさせた理由や、良い CAN-DO リストの条件と CAN-DO リストのディスクリプタ（能力記述子／文）が含むべき要素が紹介されている。特に、「条件」と「要素」に関しては、CAN-DO リストを作成する際に

は常に念頭になくてはいけない。そして、CAN-DO リストの妥当性検証について CEFR-J が取った検証方法が述べられている。CAN-DO リストは指導と評価に関わるものであるから、独自に作成する CAN-DO リストにも妥当性が保証されなくてはならない。本書では、このことについて、CEFR-J Can do ディスクリプタ・データベースからのディスクリプタの利用と改変という2つの活用方法が紹介されており、そこで大幅に改変した際の実用的な検証方法として、並べ替え調査を紹介している。CAN-DO リストの妥当性検証に是非とも参考にした方法である。

Part 3「CEFR-J を活用する」では、レベルや領域を軸とした CAN-DO の特徴と指導法、文法・語彙指導、言語テストについてなど、CEFR-J を基にした場合にどのような言語活動を授業で展開できるかを具体的に示している。特に、「やりとり」と「発表」の2領域についての内容には注目されたい。「即興性」に関する大きなヒントがここにある。

そして、付属 CD-ROM には CEFR-J の活用度を高めるために CEFR-J 本体はもちろん、Can do ディスクリプタ・データベースや CEFR-J Wordlist などが用意されている。

本書のおかげで、本校も CEFR-J に準拠しつつ学習指導要領との整合性を図った、小中高の CAN-DO リストを作成することができ、そのリストを用いた指導と評価の事例の集積が始まった。

(こばし まさひこ・

広島大学附属中・高等学校教諭)

**[新版] 日本人と英米人
身ぶり・行動パターンの比較**

ジェームズ・カーカップ
中野道雄 著

四六判・224頁
本体1,800円＋税

[評者]

柴原早苗



自立学習のきっかけとなる1冊

「大統領へのインタビューなのに、なぜキャスターは足を組んでいるのだろうか？」私は日ごろ放送通訳者として英語ニュースを日本語に同時通訳している。その際、頻繁に感じるのがキャスターや記者たちの動作。要人の前でも腕や足を組む、顔をしかめるなど、日本のニュースでは見かけない動きが目立つ。一方、幼少期に私は英国の現地校に通っていたのだが、朝礼中に鼻をすすったところ、級友に注意された。日本では鼻をすするぐらいで眉をひそめられることはない。なぜだろう、という思いがずっとあった。

本書は1973年に発行され、ロングセラーとなった『日本人と英米人』の新版である。昭和48年と言えば日本における外国人の存在自体が珍しかった時代である。著者の一人、ジェームズ・カーカップ氏はイギリス出身の詩人で翻訳家。東北大学を始め、国内の大学で教鞭を取っていた。本書は氏の日本在住経験に基づき、日本人と英米人の身ぶりや行動を多角的に分析したものである。共著者である英語学者の中野道雄教授も、自らの海外経験をもとに興味深いエピソードを寄せている。

第1部には身振りや行動パター

ンに対する両氏の分析が綴られ、第2部には101の動作が解説されている。読み物として好きなどころから読むのももちろん楽しい。目次に見出しが詳しく記されているので、事典として参照することもできるだろう。しかしそれだけではもったいない。そこで、英語指導に携わる者として以下の3つの活用法をご紹介します。

まず「動画や映画の利用」である。動画投稿サイトや映画などを学習者に見せ、動作に注目させる。どのような文脈でその動きが見られたのか、日本人はその動作をするか、否であれば日本人ならどういった動きをするかなど、考えてみるのも興味深い。本書で紹介されている解説も併せて読むことで、その動きの文化的背景への理解が深まるはずだ。

2つ目として活用できるのが「日本の小説」である。登場人物の動作に関する描写を選び出し、本書をひもといてみる。日本では一般的でも、英米人から見れば珍しい動きかもしれないことがわかる。英訳版のある小説ならば、その箇所が英語でどう訳されているか読み比べるのも楽しい。

3つ目は「自分でイラストを描く作業」である。第2部に掲載されている101の身ぶりや行動を本の余白にイラストにしてみてもいいだろう。自分だけのオリジナル事典が完成するはずだ。

これからの英語学習者に求められるのは「自ら工夫し、自立した学びを実践すること」と私は考える。読者は本書をきっかけに、非言語的なメッセージまで汲み取るべく意識が高まるであろう。

(しばはら きなえ・
放送通訳者、大学講師)

ビートルクス・ポターを 訪ねるイギリス湖水地方の旅

ピーターラビットの故郷をめぐる

北野佐久子 著

A5判・218頁
本体2,300円＋税

[評者]

平原麻子



学校図書館に置きたい1冊

世界で一番有名なネズミはミッキーマウス、一番有名なウサギはピーターラビット。

かつてビートルクス・ポターとピーターといえば、中高の英語教科書に定番教材として載っていた時期があった。最近あまり見かけなくなり残念なことではあるが、彼女の描く愛らしい画の数々を知らない人はいないだろう。

本書は、ナショナル・トラスト運動も含め、ポターの生涯にわたるイギリス湖水地方との触れ合いを軸に、100年以上も前のイギリスでの暮らしや、『ピーターラビットのおはなし』に始まる一連の絵本誕生の秘密を丁寧に描いている。あまり知られていないポターの一面にも光をあてており、多くの発見がある画期的な書物だ。

まずは手に取って、その美しい装丁に読書の喜びを予感する。ページを開けば、著者自身の足と目と耳を存分に駆使したフィールドワークの成果とともに、豊富な写真や図版の数々と湖水地方の詳しい地図。さらには美味しそうなイギリス伝統菓子のレシピまで満載の贅沢さで、幸福な読書体験にしばし身をゆだねる。

唯一の欠点は、あまりにもロマンティックな外観から、男性が、

自分の読むべき本だと気がつかないかもしれないことである。

そういうわけで本書は、絵本好きの乙女（年代問わず）へのプレゼントとしてぴったりなように見えて、実のところ置かれるべきもっとも適切な場所は小中高の学校図書館なのである。

それは以下の理由による。

① 調べ学習の良き友

本書は様々なキーワードでの検索が可能だ。たとえば、イギリス湖水地方／ナショナル・トラスト／ピーターラビット絵本／19世紀イギリスの暮らし／ビートルクス・ポターの生涯／イギリスのお菓子、等々。

本書の巻末には詳しい索引と年譜が添付されており、地理・歴史・芸術など幅広い分野での調べ学習に対応することができる。え、湖水地方の観光ガイドブックとしてさえも機能する。

② ポターはリケジョのはしり

本書を読むと、実はキノコ研究者になりたかった、というポターの意外な一面を知る。また、彼女が学者の目で描いた美しいキノコの絵も採録されている。当時の保守的な社会でその夢は叶わなかったが、創造的で人々に喜びを与える仕事をし、かつ自分の稼いだお金を使って今につながる社会貢献をなした彼女の生き方を、将来を考える時期の感性豊かな若者たちにぜひ読んでもらいたいと思う。

昨今の学校図書館は情報センターとしての役割を担い、生徒の主體的な学習の場としての活躍が期待されている。英語科からの推薦図書に、この1冊を加えてみてはいかがだろうか。

(ひらはら あさこ・

筑波大学附属駒場中・高等学校教諭)